

書室が整備されているわけではありませんので、それらをも含んだ機構、図書館群として、お互いに手を取り合って全学的な問題を考えていく、そういう機構を作ろうという事になり、その機構の審議機関としてこの協議会というのが立ち上がりました。検討ワーキンググループの報告による提言に従い、機構を立ち上げるという事は、部局長会議で既に承認をされておりますが、具体的な規定をどうするかという事で、今議論をしております。まだ実質的には機構そのものは立ち上がってませんが、この協議会の方は既に立ち上がってこうして機能しているという事です。以上が京都大学の組織の現状の説明であります。こういうことを通しまして、私自身がやはり痛切に感じますのは、こういう総合大学の図書館は、電子媒体を中心にした電子図書館機能と従来型の冊子体の

図書館機能をよいバランスで保ち、よい形でのハイブリッド型図書館というのを目指すべきだという事が1つです。

それから部局のそれぞれの図書館・図書室の自治を尊重するという事は大前提ですが、やはり学術情報のインフラというものをどうしても考えなくてはならない。ですから京都大学が総合大学として、良い形で機能するためには、インフラという一番基本的なものがちゃんと整備されていなければならない。その学術情報インフラの大きな柱の1つが間違いなく電子ジャーナルだと思うわけです。それと同時に、電子ジャーナルと対極にあります図書館としての図書空間、建物を含めた環境を一方ではきちんと整備していかななくてはならない。この2つのバランスが整ってはじめて、良い学術情報基盤ができると思います。

(ささき じょうへい)

電子ジャーナル時代の文献検索

京都大学大学院文学研究科教授 中 務 哲 郎

本日のシンポジウムのテーマの副題は、「電子ジャーナル時代の学術コミュニケーションの変革」ということで、今は電子ジャーナルの時代だそうですねけれども、その流れから見ますと私はちょっと浦島太郎みたいな話を今日はさせていただくことになるかと思います。

京都大学の蔵書は590万冊を擁するという事ですけれども、文学部はそのうち90万冊の図書をかかえています。雑誌も当然文学部は多くて、940タイトルほどを購入しております。それにかかる年間予算が1800万円くらい、それに対して一般の図書予算は800万円ですから、文学部は雑誌よりも本、図書に依拠する研究がはるかに大きいということが言えると思います。そこでこれだけの文献資料、情報資源をどのように有効利用するのかという、その方面のことを少しお話しさせていただきたいと思います。

膨大な文献を分類整理して利用者に容易にアクセスしてもらう、というような思想は実は随分古くから興っておりまして、紀元前4世紀のアレクサンドリアの図書館に多分起源をもつのではないかと思います。それを遡れば、アリストテレスの図書館であるとかオリエントの官僚制の下にある文書館などのシステムがあるでしょうけれども、現在研究されて分かっているのは、やはりアレクサンドリアの図書館のシステムではないかと思われます。アレクサンダー大王の帝国が分裂した後、エジプトにプトレマイオス王朝が興りますが、そのプトレマイオス1世がアレクサンドリアにムーセイオンという、「ミューズの神様の下にある学問所」というようなミュージアムを設置しまして、その附置施設として大きな図書館を造りました。王宮内図書館には蔵書49万巻、王宮外図書館には蔵書4万巻以上と言われる、当時の世界のあり

とあらゆる文献を集めました。そして詩人として有名なカリマコスを図書館の蔵書整理に迎え入れて、カリマコスの発想で「パーサ・パイディア」として、全ての教養を集めるという目的の下に図書整理を行います。カリマコスは後世詩人として有名ですが、800巻に及ぶ彼自身の著作のうちの120巻がこの図書整理の目録として成し遂げられたものであります。その目録120巻は『ピナケス』というタイトルで、これは字を書く板、すなわち書板というような意味ですが、「全ての学問分野における輝かしい人たちとその著作」というその副題が内容を表しています。カリマコスはそこで修辞学、法律、叙事詩、抒情詩、それから演劇、哲学、医学、こういったジャンルによる分類を立て、更にそのジャンルごとに著者のアルファベットで並べ、その著者に簡単な伝記を付けます。そしてその下に今度は作品リストを並べて、作品の冒頭の1行と作品の行数を記す、そういう書誌的な操作を施してよそから来た人もすぐにその作品にアプローチできるようなシステムを考案した、という風に考えられています。私は中国とか日本の古い書物庫の分類システムを知りませんが、今言ったカリマコスのこのシステムは大なり小なり西洋の図書館の分類体系の源流になっていると思われます。

当然、我々の京都大学の図書分類もそれと似たところを持っているのですが、最近あまりにも図書の数が膨大になりすぎたということで、検索の重要性が高まり、検索の質がかなり変わってきたと思います。そこで先ほどからも図書館の在り方の問題の一つとして言われている遡及入力ということが起こって来るわけです。従来はカード目録でずっと図書を利用してきましたけれども、文学部の場合は1987年頃からオンライン入力による目録を作るようにしまして、7、8年の間はカードとオンラインとの並存がありましたので、利用者としては一番便利な時代だったのですが、1995年ごろからはカードレスの時代になり、学生も教員も家からでもどこからでも京都大学の図書館の目録にアプローチできるようになりました。

最近では全国どこの大学の図書館でも覗けるようになりましたので非常に便利なのですが、一方でカードレスということになりましたものですから、古い図書の遡及入力がますます急がれるという状況が出てまいりました。附属図書館ではただ今47パーセントほどの遡及入力が完了している聞いていますが、文学部ではまだ30パーセントまでしか行っていません。それで文学部では現在年間2万冊の本が増えていきますので、その2万冊に関しては買って受け入れた時点で入力が完了しますが、それとは別に古い本の入力をしていかなければなりません。仮に1年1万冊のペースで行きますとあと60年かかるということになりまして、これではとても役に立ちません。アルバイトを8人雇って10年かけてやればなんとか完了すると言われていますが、そのためにはおそらく1億円くらいがいるであろうという試算がなされています。ありとあらゆる資金の調達先を見つけては図書館の方は努力して遡及入力をやってくださっています。

それからオンライン検索の問題ですが、これはちょっと突拍子もないような名前を付けさせていただきますと、「ロマンチズムの喪失」というようなことがあるのではないかと思います。例えば1948年以前の図書館の洋書目録のカードを見ますと、黒いペンで細い字で図書カードを書いておられるのです。見るだけで美術品のような感じで非常に美しい図書目録があります。それがタイプに変わり、今度はもう画面上でしかないということちょっと寂しい状況があります。それから古い図書カードを見てみますと、各作家の前に何年から何年まで生きてドイツロマン主義を代表する作家でこうこうといった作品がある、というようなカード1枚位の略歴が書いてあることがあります。それは初めに申しました紀元前3世紀のカリマコスの採ったやり方と同じで、こんなところにも連綿たる伝統のようなものが味わえてなかなか捨てがたいものがあったのです。それからカード検索の場合は目的のカードに到達するまでに前後の道草、寄り道が非常に楽しみでありました。ところ

がオンライン検索でしたら全国どこからでもアプローチできるけれども、ピンポイントで検索ができるために道草が喰えなくなってしまったという寂しさがあります。たとえばゲーテに『イタリア紀行』という名作がありますが、ゲーテは37歳の時にほとんど誰にも告げずにカールスバートの滞在先から馬車に飛び乗ってイタリアへ向かいいます。若い頃からのあこがれの地へ向かいいます。その間に見聞きしたこと、それから考えたことを書き綴ったのが『イタリア紀行』ですけれども、あれは駅馬車のスピードでの旅行だからああいうものができるのであって、ドイツからローマまで飛行機で飛んだらああいうものはできません。我々は文学部の中でも特に後ろ向きのことをやっているからかも知れませんが、ああいう馬車のスピードというのが文献検索にも必要ではないかと私は思うのです。ですから、オンライン検索にとっては難しいことかもしれませんが、注文させていただけるとしましたら、ネットの海に溺れるという

ようなことがよく言われますが、ネットの海に溺れはせず、しかも意味のある道草を喰えるような、そういったオンライン検索のシステムがソフトの面で考えられないかなと思うのです。我々の場合は一応、紙媒体で育ってまいりましたので、これからオンラインシステムに移行しても両方の形を知っているわけですが、これから来る若い学生諸君は初めからオンラインだけですから、そういった紙媒体の道草の楽しみを味わうことがありません。その辺を補償できるような、そんなものは要らないことかもしれない私だけの郷愁かも知れませんが、そういうことも味わえるような、そういったオンラインシステムというのが考えられればいいなと思っているわけです。本日の電子ジャーナルの話にはほとんど関係ないような話になりましたけれども、文学部の一研究者としてはそういうことを考えております。

(なかつかさ てつろう)

大学における学術情報基盤：情報分野の立場から

京都大学大学院情報学研究科教授 田中克己

情報学研究科の田中です。私は学術情報基盤に対する理系の中の、情報分野の研究者の立場からということと、もう一点は今日のメインのテーマである、大学における基盤的・共通的で本質的な学術資源とは何なのだろうかという観点から話をしたいと思います。

まず研究者の立場から申し上げます。急速な情報化ということで研究室の立場からいきますと、従来は研究室に置く紙による学術雑誌の購入を、少し前からですけどもいっさいやめています。まったく不要であるということです。つまり、研究活動をしていく上での主要な学術雑誌というのはフルアクセスのデジタルライブラリで十分です。情報の分野ではACM、IEEEという学会

のデジタルライブラリが完備しています。年間の学会費とフルアクセスのデジタルライブラリアクセスコストを入れて個人で約200ドルです。そういうサービスになっていますので完全に紙媒体は廃止というような方向にきています。会費を払いますと自動で送られてくる紙の学会誌があります。もう置き場所に困って、整理もしないような状況です。また、これらのフルアクセスのデジタルライブラリが非常に重要なのは、これらが、学会の学会誌や学術論文誌・ジャーナルだけをカバーしているのではないという点です。学会にはその学会で主催される国際会議であるとか、シンポジウムなどが多数ありますが、これらの会議論文集などのコンテンツもフルアクセス可能となっていま